こんなんしてます。

わだいのしごと

94

学食と給食、二人の食卓

飽食と廃棄の国

日本は世界でも1、2を争うほどの食品廃棄大国。年間500～800万トンも売れ残りや食べ残しなど食品ロスで捨てています（農林水産省、2013年）。これは世界全体の食料援助量の約2倍。国内の農水産生産額とほぼ同額を家庭から残飯として出し、その廃棄物を処理するためにも多額の費用が使われています。私たちは食べては捨てる飽食の民です。

しかし、世界には「飢餓」の現実があり、5秒に一人の子どもが飢えにより命を落としている、と国連は報告しています。世界トップの死因は餓死だと。

先進国の私たちは脂肪と糖の過剰摂取で肥満や生活習慣病に悩み、一方、アフリカやアジア、中南米などの最貧国では一さじの穀物も不足。栄養過多と飢餓が地球上で同時に存在しているのです。

では、世界に食物は足らないのか？　いえ、世界の年間穀物生産量を世界人口で割ると、1人当たり生存に必要な量のおよそ2倍が分配される計算になります。貧しい国に食料が不足するのは、本来人間に行き渡るはずの穀物を飼料として牛豚などに与えていることも原因。人間の10倍も穀物を消費する牛を育て、その肉を私たちは多食し、脂肪過多というぜいたくな矛盾に悩んでいるのです。

画期的なアイデア

肥満と飢餓、この2つの世界的課題を解決する方法はないものでしょうか。その答えを1997年、日本の若者が実践しました。彼のアイデアはこうです。

食堂やレストランでカロリーを抑えた栄養バランスのよいヘルシーな食事を摂ると、1食につき20円を開発途上国の学校給食として贈るのです。彼が立ち上げたTable for Two（TFT）は、肥満と飢餓を同時に解決する画期的な仕組みでした。20円というのは、開発途上国の給食1食分の金額なのです。

さらに画期的なのは、この20円が未来への国づくりへの投資になっていることです。

飢餓にあえぐアフリカの子どもたちの写真を見せ、この子らを救うためにどうするかと授業で取り上げると、学生らはまず、寄付や食料援助と答えます。普通の発想でしょう。しかし、対処療法では砂漠に水を注ぐような限界もあります。その国が飢餓から脱出する根本的な方法は？

貧しく飢餓に直面する国では子どもは学校どころではなく、学校に行かないから教育水準も低く、大人になっても貧困から抜け出せない負の連鎖が続くことになります。しかし学校に行けば給食が食べられる、となれば親は子を学校に行かせ、学校に行けば「ついでに」勉強もする。そうすればもっと勉強して仕事に就き、家族や国のために貢献したいと思うようになるかもしれない。20円は1食を満たすだけではない、学校給食だからこそ、その国が負の連鎖から脱出する糸口になる大いなる可能性を持っているのです。

TFT運動は世界に広がり、大学にも広がりました。和歌山大学でも2011年にこの運動に共感する学生らがヘルシーメニューを考案し学生食堂に提案。理解ある料理長が導入に尽力してくれたそうです。現在、先輩の志を継いで活動するのは白井君（3回生）ら5人。仲間を募集中の白井君はTFT活動を「一粒で二度おいしい」と言います。おいしく食べてアフリカの子どもとつながっている、そんな誇りが持てると。

和大生と現地の子どもが、学食と給食で、時と空間を越え一緒に食卓を囲む―和歌山市栄谷の丘の上の空とアフリカの空がつながっている、人間どうしの尊厳を育むつながりでしょうか。和大生もなかなかやるな、と応援しています。

豊かな食があればこそ…（タイ）

TFTランチ（和大）

プロフィル

湯崎真梨子（ゆざき　まりこ）
和歌山大学産学連携・研究支援センター　教授
専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。